

ISSN 0910-2396

野鳥たより

—北海道—

第 114 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成10年12月21日

コクガン



1998. 4. 宮島沼 撮影者 川上 秀年

〒003-0875 札幌市白石区米里2221-14



もくじ

ケアンズ探鳥紀行	樋口 陽子	2
北海道のヤマヒバリ	函館 佳子	3
石狩川オオハシシギ顛末記	筒渕美幸・藤巻裕蔵	7
宮島沼にアカツシガモ	広 報 部	8
野 鳥 余 話	広 報 部	9
探鳥会ほうこく	白澤 昌彦	10
探鳥会あんない		11
探鳥会あんない		13
鳥 民 だ よ り		13

私の探鳥地 (34)

冬の石狩湾新港

樋 口 陽 子

石狩湾新港は冬の探鳥地です。11月初旬ぐらいから翌年の4月初旬ぐらいまで、各種カイツブリ類や海ガモ類を楽しむことができます。カイツブリ類では、ハジロカイツブリが安定して見られ、ミミカイツブリやカムリカイツブリも良く見られます。アカエリカイツブリは運が良ければというところです。海ガモ類で最も多いのはウミアイサで、ホオジロガモ、スズガモもかなりいます。シノリガモは少数ですが安定して見られ、またコオリガモも時々見られます。沖合にたくさん見られるクロガモもよく港内に入ってきますし、時にはビロードキンクロも入ってきます。



石狩湾新港の簡単な地図とポイント(A~F)を載せましたが、お手持ちの市販の地図と合わせてご覧下さい。なお、公共の交通はありませんから、自家用車などが必要になります。

A~C: Aは樽川埠頭で、ここに車を止めることができます。B、Cへは図の点線のように海に沿って徒歩となりますが、余程の雪でない限りは長靴で大丈夫です。B地点にはモニュメントのような物が建っています。C地点からは新川方面の外海も見えますが、見られるものは港内とほとんど変わりありません。AからCまで歩くだけですと20分程度ですから、たいした距離ではありません。

D: B地点の向かい側です。見られる鳥はB地点からのものと同じですが、鳥の位置によっては、こちらからの方が近くで見られます。

E: 茨戸川と放水路がつながっているところです。湾の中の湾になっているようなこの場所も、覗いてみたいところの一つです。

F: 東埠頭です。先端の方をぐるっと回ることでも

ますが、短い方の防潮堤の上のウミウやカモメ類を見るのがメインになります。

A~Fのうち、おすすめはA~Cの徒歩コースです。いつもは往復2時間ほどかけてゆっくりと見て歩いています。海の鳥ばかりではなく、B地点では昨冬にユキホオジロに出会ったこともあり、すぐ頭の上をオジロワシが飛んでいくこともあります。

石狩湾新港は有数の釣り名所で、休日には釣り人でいっぱいになりますが、探鳥にはほとんど影響はありません。むしろ、そんなことで鳥たちが人慣れ(?)しているのでしょうか、ハジロカイツブリやシノリガモなどは随分と近くで見られます。

気を付けなければならないのは天候です。吹雪にでもなったら全く探鳥になりません。それまでいい天気だったのに突然吹雪になることも珍しくありません。晴れの時でも寒さはかなりのものです。熱い飲み物を用意し、寒さ対策の重装備でお出かけになることをおすすめします。

〒002-8065 札幌市北区拓北5条2丁目10-17

ケアンズ探鳥紀行

函館佳子

海外探鳥ツアーがさかんな昨今ですが、1997年10月に催されたオーストラリア・ケアンズ探鳥ツアーには、故柳澤信雄前会長ら何人かの愛護会会員も参加しました。この記事は、そのツアーにご一緒された函館佳子さんに書いていただいたものです。紙面の都合で第1日目の分だけですが、日本では見られない多くの鳥が登場しています。写真はすべて函館さんによるものです。どうぞ、お楽しみ下さい。

もうこんなに日が経ってしまったのかと思うが、1997年10月7日から11日まで、坂口さんとオーストラリア北東部のケアンズに行ってきた。

8月下旬の道新に探鳥ツアーの広告を見つけたのが事の始まりであった。「オーストラリア探鳥ツアー5日間」、行きたいと思っていた国の一つであり、日数も無理なく、値段も手頃、普通の観光旅行は数々あれど、「探鳥ツアー」というのは、滅多にあるものではない。という訳で、申し込みをし、早速資料集めに掛かる。坂口さんは、一昨年の「バーダー」に高田勝さんと叶内拓哉さんのコンビによる特集記事があったのを思い出し、私は、本屋の旅行案内書コーナーで、オーストラリア関係のを片っ端から引き抜いて見る。ケアンズについて、それほど紙面が割かれている訳でもないで、10月の平均気温は最高29度、最低20度などと立ち読みして、後は、地元の旅行会社のパンフで情報を集めるという調子で事を足らしたのだから、本屋さんには、申し訳ない限りだった。

しかし、一番欲しかったオーストラリアの野鳥図鑑は、手に入らず仕舞いでいるうち、「バーダー」10月号に図鑑特集が載ったが、どうせ注文しても間に合わないと思ったので現地で買うことに決めて出発した。往路の航空機内で、添乗員に図鑑購入を依頼しておいたが、他にもその希望があったのか、探鳥開始の初日にバスの中で希望を取りまとめ（殆ど全員が希望した）、ホテルへの帰途、それを受け取り、夜にはその図鑑を使って鳥合わせをしたので、とても便利だった。ちょっと付け加えると、希望者全員分14冊の購入には2軒の本屋さんを廻らなければならなかったのであるが、函館の本屋さんで「日本の野鳥」とか「北海道の野鳥」とかを買おうとしても、その日の内にこれだけ揃えられるとは思えない。さすが自然探検の拠点の町だと思った。どうしてどうして主要市街地幅300mの町などとばかにしたのではない。幅300

mというのは、どこかの旅行社のパンフの略図を見て私が受けた印象である。それでも人口10万人というのだから、後の人達は広大な土地に散らばって住んで居るのだろう。

さて、私達が出発したのは、10月7日午後7時15分新千歳からである。カンタス航空の、勿論エコノミークラス。これで8時間は、かなり窮屈だなあと思ったが、出国手続きなど滞りなく終わり、離陸した時は未知の世界に旅立つ喜びに胸が高鳴った。私にとっては、初めての海外の旅の始まりである。深夜、照明を落とした機内で、ひたすら眠ろうと努力した甲斐なく寝不足のままケアンズ空港到着。10月8日、午前4時45分、時差は約1時間なので、日本時間の3時台である。入国手続きを済ませた我々一行、添乗員を含め16名を、背の高いハンサムな白人が出迎えてくれた。我々のツアーガイドのマシュー・ブラウンさんである。ホテルに寄り、荷物を下ろしたら、直ちに出発と言う。小型バスの後ろに荷物を積載した荷車（あれを何と呼ぶか私は知らない）を牽引してホテルまで行き、それを切り離して出発OKという訳だ。

我々のバスは未明のケアンズの市街地を抜け、郊外の住宅地といった風情の町を通過して走った。暗い中でも鳥の声が聞こえ、窓の外にはチラチラと姿も見えて来た。皆「あれ何だろう？」と口々に自分の見ている鳥の名を知りたがる。マシューは運転しながら外を透かして見て「インドハッカネ」などと答える。そのうち夜が明けて辺りがはっきり見えて来た。マシューが右を示し「コチラ側二、クロトキガ、止マッテイルヨ」とか「向コウハ、シロハラウミワシネ」などと教えてくれる。このマシューのことだが、日本語が淀みなく出てくる。近ごろ失語症傾向にある私など自分の日本語がカタコトに思われてくる。彼の日本語が本場物であると見当を付けた私は、「日本にどれ位の期間いらっしゃったんですか」と尋ねて見た。「ワタシガ居タノハ、1年ト6箇月。」「たったのそれだけで、そんな流暢な日本語が使えるんですか。」と感心すると、「ワタシガ居タ頃、外国人少ナカッタカラネ。」と勢い日本語を使わざるを得なかったというニュアンスで答えて来た。何はともあれ、今回のツアーは、陽気なマシューのお陰で楽しく大いに盛り上がったのである。

やがて我々は、マシューに導かれ、バスを降りて、とある公園に入った。池の中にシラサギがいる。「コサギだろう」とか「あっちはダイサギだろう」とかと言いな

がら歩く。頭上からけたたましい声が響く。「ワライカワセミ」だ。インドハッカ（カバイロハッカともいう）が芝生の上を歩く姿が目につく。マシューが、飛んでいる鳥、止まっている鳥を色々教えてくれるが、見ることできた鳥、できなかった鳥、こちらの成果は、人によって様々である。しかし、絶対皆が見られたと思う鳥は、コサギ、ササゴイ、ワライカワセミ、ツチスドリ、インドハッカ、ヨコフリオウギヒタキ、シロハラウミワシ、ヘビウ、ゴシキセイガイインコ、カササギガンなどである。

このうちゴシキセイガイインコは、6、7羽の群れが花から花へと移動していて人を恐れる風もなかったので、カメラを持っている人は皆構えたが、何しろ片時もじっとしていないので、結構、撮影は難しい。全員揃ってじっくり見られたのは、NHKの「生き物地球紀行」で放映され、一夫二妻で知られるカササギガンである。日本の蓮とはまた違った大きな蓮が咲く池の中に10羽程の群れが泳いでいた。顔の黒いものも混じっていたが、体もやや小さ目なので若鳥と思われた。しばらく眺めていると、陸地に上がり始めたので、私もそちらに移動し、その姿をカメラに収めた。けれどもツアーの一行は、別方向に向かっていたので急いで追いかけて行くと、坂口さんがフィールドスコープを皆さんに覗かせてあげていた。私も覗かせて貰ったが、池の奥の方に隠れつつある二羽が「アオマメガン」に違いないという。私もそうだと思う。灰青色の体毛の中で、胸の一際濃く青い模様が美しい。写真を撮るには暗くて遠かったが、こんな所にいたという心覚えの為にシャッターを切った。この公園でのバードウォッチングは、鳥ではなく蛙で締めくくられた。「コレ、カエルダヨ」と差し出されたマシューの掌に、親指の爪ほどの蛙がのっていた。指差された足元を見ると、そこらじゅうに無数の小蛙がバツミみたいに跳ねているではないか。何とか踏み潰さないように歩こうと努めたが、それは無理だった。蓮の悪さを諦めてもらうことのできるだけ大股で歩いたが、何匹の蛙を踏み潰したのか。それにしても、これだけ無数の蛙がいたのでサギやワライカワセミやら鳥がたくさんいたのかもしれない。

後で考えれば、自由行動のエスプラネードを除けば、この公園が一番多くの種類を簡単に見られた場所だった。朝食前の散策でワライカワセミ、カササギガンなどの代表種を見てしまったものだからたいしたものである。ちなみにこの公園の名はCENTURY PARKである。マシューは、「百年記念公園」と呼んでいた。

朝食後、今日のメイン、カソウェル（ヒクイドリ）やライフルバード（コウロコフウチョウ）の住む熱帯雨林、モスマン溪谷に出発した。マシューは、かなりのスピー

ドを出しながら、「シロガシラトビガ飛ンデイルヨ。」とか「ミサゴガ止マッテイルヨ。」と教えてくれる。「私、何見テ運転シテルンデショウネ。」という言葉を変えながら。道の周囲には広大な砂糖きび畑が広がっていた。マシューの話の様子からすると砂糖工場もしくは少数の大地主がそれを所有しているらしい。そして住民の多くはその砂糖工場の労働者と言うことである。工場は大赤字であるが、国庫から多額の補助金が支出されている。多数の失業者を出すよりは、砂糖産業を支援するという



ワライカワセミ

政策が取られているという訳だ。そしてその労働には、原住民のアボリジニが従事しているらしい。時々、コンバインに乗って刈り入れをしている所があったが、そこに住む野鼠などを狙ってシロガシラトビなど猛禽類が飛び交っているのが見られた。

モスマン溪谷に向かう道々、マシューは、カソウェルに出会った時の注意をした。「私より前二出テハダメデス。カソウェルハ、足ノ力ガ非常ニ強イ。怒ッテ暴レルト人間ナンカ簡単ニ爪デ引キ裂カレテシマウ。非常ニ危ナイネ。」「モシ万一ノ時ハ、皆サン逃ゲテ下サイ。私一人ダケ犠牲ニナリマスカラネ。」途中、道端にカソウェルリバーと書かれた道標があったが、この川の上流で、狩に行った白人が初めてカソウェルに殺されたのだそうだ。それにちなんで「カソウェルリバー」と付けたのだということだ。

そのカソウェルも、今では、絶滅の危機に瀕していて、オーストラリア全土で1700羽程しかいないのだという。原因は熱帯雨林の開発である。国が保護に乗り出したが、人工下での繁殖は成功せず、熱帯雨林中の自然繁殖以外に道が見付からないということで、飛び地状態で僅かに残された林と林をつなぐ方法を取ったが、思わしい成果を上げていないということだった。「オーストラリアデハ、何デモオソクノ時ニヤルノネ。」という言葉で「時すでに遅し」ということかと聞きながら、「日本はもっ

と遅い。多くのものが保護以前の状態にある」と思った。

そうこうするうちにモスマン溪谷に着いた。バスを降りて、函館山の旧登山道の上り口位の幅の山道を5キロ程上ったり下ったり、吊り橋を渡ったりしたが、望遠カメラに三脚を付け、足元ばかり見て歩いた。もう随分奥まで来たなあと思う所で、けたたましい声が出た。ライフルバード（コウロコフウチョウ）だ。その姿を求めて頭上を探す。首を直角に近く曲げたり、体を右に左に、あるいは高く低く、様々な姿勢をしてジャングルの中を窺う。何度めかの出現をやっと目に捉え、止まった枝を確認して双眼鏡を使う。生い茂るジャングルで、鳥の姿をまるごと見るのは困難である。これだけ苦労して歩いて来れば、たとえ、部分的に木の葉や枝に隠されていようとも、その青い姿を捉えれば、ライフルバードの雄を見ることが出来たという喜びはひとしおである。見付けられずにいる人に教え合っているうちに、人々の心が優しく融け合っていく。楽々観光では得られない仲間意識が芽生える。

細い道をたどるのだから、前の人だけが、あるいは後の人だけが見られたということも起こるのだが、この後、坂口さんがなかなかこないなあと思っていたら、何か収穫を持ってやって来た。ライフルバードのメスを見付けて来たのだ。坂口さんの詳細な説明を聞いて、マシューは「コレデショ？」と図鑑で確認する。私は見られなかったわけだが、坂口さんの面目躍如の場面展開はとても嬉しかった。

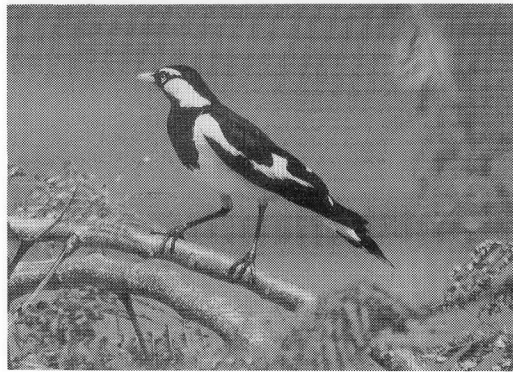
このジャングルには、ムシクイの仲間と思われる小鳥が多く見られたが、いずれも動きが速く確認は難しかった。けれども、植物相は熱帯雨林独特のものが多く、着生蘭やヘゴの木（巨大シダ）やら、奇怪な巨木—絞め殺しの木（絞め殺しいちじくとも言っていた）が目についた。中でも、葉や莖らしきものがなく、いきなり木肌にジャズミンに似た白い華麗な花が咲いていた情景が印象深い。その花がついていた木は、巨木で苔がついているので苔の花かとも話し合ったのだが、隠花植物とは思えない美しい花だった。

この度の旅行では、このモスマン溪谷が一番厳しいコースだった。起伏の多いコースを、カメラを担いで、皮肉にも虫よけスプレーが汗と混ざって目にしみるのに耐え、湯上がりみたいに汗でびしょ濡れになって歩くのは大変だった。しかも、その5キロの間、カメラを使うことは一度も無かった。こういうジャングルでは、ある程度接写の効く、短いレンズをセットしておく方が便利なのである。未知のコースを歩く時、ただただカメラが重荷になるだけというケースがあるが、ひょっとしたらシャッターチャンスがあるかもしれないという期待、この日は、カソウェル（ヒクイドリ）を写せるかもしれないという

期待が、時に息切れする私を支えてくれた。写真は写せなかったが、自然を自然のままに味わうことの出来た場所、ライフルバードを見ることのできた感激をこの先一生忘れないだろう。

モスマン溪谷を後にして、バスは、昼食をとるゴルフ場のクラブハウスに向かった。そこは日本資本が入っているらしく、池田大作さんやら、ゴルフの倉本さんやら、野球の長島さんやら日本の有名人の別荘の立ち並ぶ別荘地を通り抜けてハウスの正面玄関に着いたら、DAIKYOと書かれていた。豪華レストランに、トレッキングスタイルでどかどか入って行くのは気が引けたが、余り人がいなかったのと団体さんの強みで押し通した。従業員も日本語が通じだし、料理がバイキングなのも助かったし、朝食とは違って変わったおいしい食事に疲れが癒された。

食後は、すぐに鳥見。先に外に出た人たちが見つけた、ツチスドリが巣に入っているところを二階のバルコニーから写していると、I夫人がヨコフリオウギヒタキが、



ツチスドリ

これもまた巣に入っているのを見付け、これも鳥さんにゴメンを言いながら撮らせて貰った。

その後は、ホテルに帰るだけ。結構、長道中だったが、マシューが退屈させないように気を使い、世界の毒蛇中の最上位はオーストラリアの蛇であることなどを話してくれた。カソウェルの話では英雄的決意を語った彼だが、何とかという蛇が出て来たら、後ろの人を順々に前に押しやって自分は逃げるのだと言っていた。その毒蛇の解毒用の血清は適正な使用量が未解明なのだそうだ。

やがて、ホテルの集中しているエスプラネード通りに戻ると、トリニティ湾が見え干潟が広がっていた。ここは、グレイトバリアリーフと呼ばれる大サンゴ礁に守られた干潟で、シギ、チドリ越冬地として有名な地である。ホテルに入り、着替えをして、双眼鏡と貴重品だけ持って散歩に出た。先に出掛けたYさん達が戻って来た

ところで、ずっと向こうにたくさん鳥がいるところがあると教えてくれ、ペリカンと記念撮影をして来たとの話だった。私は、カメラを持たなかったことを悔やんだが、夕飯の集合時間まで余り時間が無かったので、そのまま散歩を続けた。本当にペリカンが2羽、芝生の上を走って人を追いかけたり、立ち止まって人と一緒にカメラに収まったりしている。私達も坂口さんのカメラで記念撮影としゃれ込んだが、ペリカンは、近付き過ぎると威嚇するように羽根を拡げ、くちばしを突き出して向かって来るので、ちょっと怖かった。そこへおじさんが一人やって来て何か餌を与えた。1羽がそれを独占しようとして他の鳥を追い払っていた。いつの間にかペリカンは3羽に増えていたが、周りを見回しても群れは見当たらなかった。これは、あのおじさんのペットなのだろうかと思ったら、カメラを持ってペリカンに密着取材？していた坂口さんが戻って来て、野生のもののようにだと教えて



カササギガン

くれた。そのうち時間が無くなり、鳥影は見えていたが、干潟をよく観察できないまま「明日がある」と思ってホテルに引き返した。

さてオーストラリア第1夜の夕食は、マシューのお薦め「オーストラリア人ニ、評判イイヨ」という、アカシアコートホテル（要するに我々の宿泊ホテル）のバイキングである。予約をしていたのだが、凄い行列ができて、中に入るのも料理を取るのにも並ばなければならなかった。しかし、皆、整然かつ静然と並んでいた。料理を取りに行き来するのに、その行列を横切らざるを得ない場面が多々あるのだが、「エクスキューズミー」と必ず断わっているのに感心した。

その後、免税店に買物に行く時間を取った為、鳥合わせを10時から行った。一行の男性の殆どが北海道野鳥愛護会の会員だったので、その人達が中心になって、新品の図鑑片手に、最初のページから、見た見ないを確認して行った。英語の出来ない私は、この鳥合わせがなかつ

たら、何という鳥を見たのかさっぱり分からずじまいであつたらう。図鑑でFIG BIRDと突き止めてコンサイスを引いたところで、チモールメガネコウライウグイスなどという和名が出て来はしない。その他のことでも、このベテランの方々には、色々教えていただいたことを深く感謝している。さて、鳥合わせが終わった時は12時を過ぎていた。こうして鳥見の初日、ながーいながーい1日は終了した。

2日め以後も連日楽しい探鳥であつたが、残念ながら紙面が尽きてしまった。最後にこのツアーで私たちが観察した鳥94種をあげる。観察種とその和名についてはご一緒された愛護会の方々とは慎重に検討したのですが、もし錯誤があればお許しを願います。

ヒクイドリ、ヤブシチメンチョウ、ヤブツカツクリ、カササギガン、コクチョウ、アオマメガン、マミジロカルガモ、マガモ、ヘビウ、カワウ、コシグロペリカン、シロガシラサギ、アマサギ、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、クロサギ、ササゴイ、オーストラリアヘラサギ、キバシヘラサギ、ムギワラトキ、アカアシクロトキ、トビ、クロムネトビ、アカムネトビ、シロガシラトビ、ミサゴ、シロハラウミワシ、オーストラリアチョウゲンボウ、オーストラリアツル、クイナ、ネッタイベン、セイケイ、オオバン、オオジシギ、オオソリハシシギ、オグロシギ、ホウロクシギ、ダイシャクシギ、チュウシャクシギ、アオアシシギ、ソリハシシギ、トウネン、ハマシギ、キリアイ、セイタカシギ、オーストラリアセイタカシギ、トサカレンカク、ミヤコドリ、メダイチドリ、シロチドリ、ズグロトサガゲリ、ギンカモメ、オニアジサシ、ハシブトアジサシ、ベニアジサシ、カノコバト、チョウショウバト、シロクロバト、ウォンプーアオバト、キバタン、ゴシキセイガイインコ、キンショウジョウインコ、アカクサイインコ、キジバンケン、シロハラアナツバメ、ワライカワセミ、モリショウビン、ハチクイ、ノドジロキノボリ、ハシナガムシクイ、メグルムシクイ、イワバボウズミツスイ、キンイロモズヒタキ、ヨコフリオウギヒタキ、オウギヒタキ、ハイイロオウギヒタキ、キバラハイイロオウギヒタキ、チモールメガネコウライウグイス、カワリカッコウサンショウクイ、モリツバメ、ツチスドリ、カササギフエガラス、コウロコフウチョウ、フヨウチョウ、サクラズメ、イエスズメ、キバラタイヨウチョウ、ハイムネメジロ、トラツグミ、オナガテリカラスモドキ、インドハッカ。

〒040-0012 函館市時任町4-6

北海道のヤマヒバリ

筒淵 美幸・藤巻 裕蔵

ヤマヒバリは、日本鳥類目録などでは迷鳥、またはまれな冬鳥や、まれな旅鳥とされているが、最近になって日本各地、とくに日本海側でよく見られており、標識記録も報告されている。北海道でも最近各地でいくつか記録されるようになってきている。ここではこれらの記録をまとめてみた。

これまで北海道では次の記録がある。

- 1899年3月20日、札幌市（日本鳥学会 1974）。
- 1988年11月13日、函館市函館山、1羽標識（佐藤 1994）。
- 1991年11月18～19日、利尻町沓形、1羽（小杉 1991）。
- 1991年11月19～24日、松前町白神、4羽標識（佐藤 1994）。
- 1992年11月6日、函館市函館山、1羽標識（佐藤 1994）。
- 1993年11月3日、函館市函館山、1羽標識（佐藤 1994）。
- 1994年2月24～26日、千歳市支笏湖畔、1羽（北海道新聞 1994年3月14日付）。
- 1994年3月1日、札幌市西岡公園（北海道新聞 1997年3月14日付）。
- 1996年11月3～4日、松前町白神、2羽標識（山階鳥類研究所 1996）。
- 1996年12月中旬、芽室町、1羽（北海道新聞 1997年1月17日付）。
- 1997年1月26日～2月24日、上士幌町糠平、1羽（筒淵・藤巻 1998）。

この他に月日は不明であるが、1996年に羽幌町天売島で2羽標識されている（山階鳥類研究所 1996）。

糠平で観察された個体は、単独で、またはスズメの群れに混ざって地表で採餌しているところがよく観察された（図1）。スズメと異なって警戒心が弱く、写真撮影をするために近づいても逃げることがなかった。ただ、カケスが近くにくると、ササやぶに逃げ込むのが観察された。

以上のように、記録は11月から3月にわたっている。このうち11月の例は渡り途中と考えられ、個体数は少ないものの、かなり定期的に渡っているように思える。また1か月近くにわたって観察された例は、渡り途中というよりはむしろ冬の間定着していると考えた方がよいだろう。

記録された所は、十勝地方の上士幌町と芽室町を除くと北海道の西海岸沿いまたは札幌市や千歳市のようにそれに近い地域に限られている。北海道北部の浜頓別町と東部の根室市には、それぞれ環境庁の1級標識ステーション

があり、毎年多数の鳥類が標識されているが、これまでヤマヒバリの標識記録はない。また根室地方南部では20年間近く高田（1991）によるかなり詳しい観察が行われているが、やはりヤマヒバリは記録されていない。

ヤマヒバリの繁殖分布域は、ユーラシア大陸東部では、サハ共和国、チュコト山脈西斜面、アナディール川下流域、オホーツク海沿岸、シホテ-アリン山脈、スタノヴォイ山脈を含む地域、モンゴルの山地である、多分これらユーラシア大陸東部で繁殖するものが日本に渡来すると思われる。

日本への渡りのコースとしては、千島経由、サハリン経由、大陸から直接の三つが考えられる。このうち、千島経由は大陸における繁殖分布域、根室においてこれまでほとんど記録がないことから、可能性は低い。サハリンでは、Gizenko（1955）はヤマヒバリを記録していない。Nechaev（1991）もほぼサハリン全域にわたる10年近くの調査でも観察しておらず、記録として1938年5月26日オホーツクコエ（富内）における高橋（1939）の採集記録と日本鳥類目録の記述をあげているだけである。また、上述のように浜頓別の1級標識ステーションではこれまで標識された記録がない。これらのことから、サハリン経由の渡りコースの可能性も低い。環境庁の標識事業の報告書によると、1961年以来1996年までヤマヒバリは北海道、飛鳥、河北潟、中海など主に日本海側で37羽が標識されている。大陸から直接渡来するコースも根拠にとほしいが、これまでの標識記録や日本海側における観察記録の多さからみると、上にあげた3コースのうちでは最も可能性が高い。



ヤマヒバリ

結論としては、北海道でヤマヒバリは数少ない旅鳥で、まれな冬鳥であり、大陸から直接渡来する可能性があるといえる。

なお、この文は日本鳥学会誌に掲載した筒渕・藤巻の

「北海道におけるヤマヒバリの記録」をやや簡単にした紹介である。

〒080-8555 帯広市稲田町

帯広畜産大学野生動物管理理学研究室

石狩川オオハシギ顛末記

全国的にみても希な旅鳥あるいは冬鳥であり、北海道では、これまでに十勝、釧路、根室、網走での散発的な記録しかないオオハシギが、1998年秋、石狩川札幌大橋下流の排泥池に飛来した。いち早く情報が伝わり、多くの探鳥家の目を楽しませたが、発見から13日目、観察者の目前、突然のアクシデントにより彼（彼女？）は、この世から姿を消してしまった。編集子もその場に居合わせた一人であるが、ここではオオハシギの発見から死までの顛末を紹介してみよう。



オオハシギ

オオハシギを最初に発見したのは、愛護会会員の渡邊智子さんであった。9月21日の昼頃、石狩川右岸、札幌大橋から数百m下流の河川敷に造られた排泥池に、オグロシギと一緒にみかけないシギが1羽いるのを見つけた。全体の大きさ、嘴の長さ、羽色などから、オオハシギの幼鳥と判断した。その後数日間は観察できなかったが、9月26日からは同所に居続けるとともに、渡邊さんからの連絡の輪がどんどん広まり、多くの探鳥家の目を楽しませることとなった。

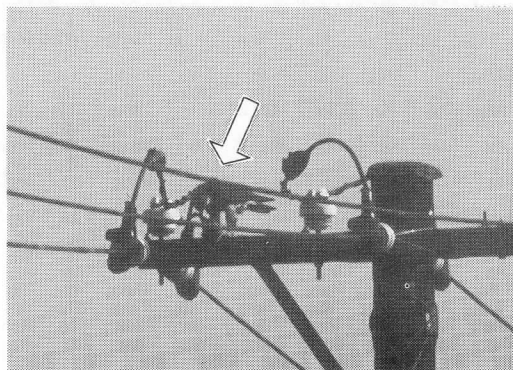
9月26日、27日の週末には10名を越す愛護会会員も集まり、たくさんのスコープで眺められ、何台ものカメラにも写されということになった。その両日の観察の限りにおいては、オオハシギが単独でいることはなく、たいていはオグロシギと一緒に、時にはダイゼン、アオアシギ、ツルシギも加わって十数羽の群れとなって採餌と休息を繰り返していた。身体はオグロシギより一回り

小さいが、嘴の長さは負けず劣らずで、身体にくらべると随分と長い印象であった。また、足が短いせいか、全体が何となくアンバランスな感じを受けた。何かの加減で他のシギ・チドリと一緒に飛び立つこともあったが、長時間待つこともなく、元の場所に戻り、また採餌と休息というのが大体の行動パターンであった。

翌週末10月3日。この日も昼頃にはやはり10名を越す会員が集まり、オオハシギをあらためてじっくりと観察していた。午後2時頃、オオハシギは休息の姿勢、見ている方はちょっと目を休めて鳥談義というところだった。

鳥たちの一斉の飛び立ち。ハヤブサ！ アツという間の出来事だった。ハヤブサは1羽の鳥を足で捕え、すぐ近くの電柱にとまった。スコープで見ると、捕えられた鳥はまさにオオハシギ。我々から約100m離れた電柱の上でハヤブサはおもむろにオオハシギを食べ始めた。そのうちに長い嘴だけがちぎられて電柱の下にポロリ。見ている人間たちは、ただただ茫然とするのみであった。よりもよってめったに見られないオオハシギが……。他のシギならともかく……。というのが皆の正直な気持であった。

ハヤブサが来たのは実はこの日ばかりではなかった。排泥池のシギ・チドリを襲う姿は頻繁に見られた。だが、観察者が見ているところで狩に成功したのは、この日が初めてであった。20分ほど電柱の上で食べ続けた後、そ



オオハシギを食べるハヤブサ

のハヤブサは半分食べかけのオオハシギを足で掴んで、1 kmほど離れたところにある送電線の鉄塔に移動した。スコープでかろうじて見える程度であったが、そこですっかり食べ尽くした様子であった。

オオハシギの発見から、ハヤブサに襲われるまで13日間。随分と多くの人たちが情報を聞きつけてやってきたが、初めてオオハシギを見たという人がほぼ全員であったと思われる。そんな中での突然のアクシデント。このようなことは自然界では普通のこととは思いますが、やはり残念無念という感じは捨てきれず、回収してきた長い嘴を皆でみつめるだけであった。ちなみに嘴の長さは8 cm近くであった。

図鑑等によると、オオハシギはユーラシア大陸東部と北アメリカ大陸西部の北極圏に繁殖分布し、北アメリカ大陸南部からメキシコにかけて越冬するという。このことだけから考えると日本には縁のない鳥のようである

が、実際にはごく少数がやってきて、中には越冬しているものもあるという。1960年以降、本州以南の主に太平洋側で毎年のように記録があり、通算すると現在までに数十例の観察記録があるものと思われる。

最後に、今回の石狩川排泥池での観察に続き、10月11日の宮島沼探鳥会において、オオハシギが3羽観察されていることを付け加えておく。写真などの具体的証拠はないが、石狩川排泥池での観察からそれほど日をおかず、まだ記憶が新鮮なうちに同種の鳥を再び見るようになった。オオハシギと同定した理由については、この号の宮島沼探鳥会報告に記されている。オオハシギをはじめ、過去に記録が少ない鳥でも、各地での観察記録の蓄積が北海道への飛来状況の実態を知る手掛かりとなっていくであろう。

文責 広報部

宮島沼にアカツシガモ

マガンで有名な宮島沼（空知管内美唄市）で、1998年10月17日、1羽のアカツシガモが観察された。これまでの北海道での記録としては、1982年6月に根室の春国岱でのもの（日本野鳥の会北海道ブロック支部連合協議会、北海道地域別鳥類リスト、1991）がある。また、詳細は過去の文献をたどらなければならないが、胆振、網走、根室という記録もある（Mark A. Brazil, The Birds of Japan, 1991）。過去の記録を完全に把握することは困難であるが、北海道では極めて珍しいものであることは確かである。

この珍客については、撮影されたビデオ画像が数日後テレビ放映されたが、宮島沼の会会員であり、また北海道野鳥愛護会会員でもある長谷川富昭さんから観察記録と写真をいただいたので紹介する。

1998年10月17日（土）、天候：曇のち晴

昨日に続き今日も早朝から雁の観察に、宮島沼へ出かけた。宮島沼に着いたのが7時55分頃だったが、沼の雁は少数のみで、ほとんど周辺の水田へ採食に出かけた後だったので、沼全体を双眼鏡で眺めてから（注：この時点では残留の雁と鴨類のみで、アカツシガモは確認できず）すぐ雁の群れを探しに北村方面の水田へ向かった。10時10分、水田で採食していた雁は少しずつ沼に戻りはじめたので、私も沼に戻ることにした。10時30分頃、沼に戻った時には、鳥見の人たちが既に10人ほど来てたが、その中の一人から、アカツシガモ一羽が、マガン

の群と一緒に沼に入って来たのこを教えて頂き、早速スコープで観察する事にした。図鑑と照らし合わせると、アカツシガモの雌のようだ。サイズのほうはマガンよりひとまわり小さい感じで、赤茶げたハクガンのようにも見えるし、動作やしぐさもマガンのようで、特に鳴くときの格好が雁類と同じに見えた（嘴を約45度の角度で空に向かって鳴き叫ぶ）。なお、このアカツシガモはマガンと行動をともにしているようで、15時30分頃から次々とマガンは、沼から水田へ採食のため出て行くが、その時もアカツシガモはマガンの一群と一緒に沼から出て行った。日が暮れる17時頃から、次々とマガンは時の宮島沼へ戻ってくるが、このときもアカツシガモはマガンの一群と一緒に戻ったようだった（自分は確認しなかったが、鳥見の数人が確認済み）。



10月18日(日) 天候: 大荒れ(雨と強風)

台風10号崩れが北海道に接近

この日は、雁を保護する会の星子廉彰さんが大荒れの天気の中、宮島沼とその周辺を探したが、アカツクシガモは見つからず。

10月19日(月) 天候: 晴

9時30分頃から夕方近くまで、宮島沼と周辺の水田を観察するも、アカツクシガモは発見できず。宮島沼のアカツクシガモは、発見当日10月17日(土)のたった1日だけの滞在と思われる。

以上であるが、原色日本野鳥生態図鑑・水鳥編(中村登流・中村雅彦著、保育社、1995)によると、アカツクシガモはユーラシア大陸の低・中緯度地方の中央部と地中海地域に繁殖分布し、冬はエジプト、ペルシャ湾、インド、中国南部、東南アジアなどに渡って過ごすという。

日本には冬鳥として少数が渡来するが、本州中部以南に現れることが多く、初めに書いたように北海道での記録は極めて少なく、今回の観察は貴重な一例である。なお、後日長谷川さんから連絡を受けたところによると、今回のアカツクシガモについて、観察記録中には雌のようだと書かれているが、雄の幼鳥の可能性もあり、山階鳥類研究所に写真を送り、鑑定を依頼するとのことである。

文責: 広報部

宮島沼ホームページのご案内

インターネット上に宮島沼のホームページが開発されています。春秋のガン類の飛来状況などをリアルタイムで知ることができます。アドレスは次の通りです。

<http://member.nifty.ne.jp/miyajimanuma/>

野 鳥 余 話

クマゲラの雌雄

平成10年6月11日の北海タイム스에秋田県の森吉山山麓でクマゲラのヒナの巣立ちが確認されたことが載っていました。その記事の中に「ことしは雌と雄一羽ずつが育ち」とヒナの雌雄にふれていました。

これまで、野鳥のヒナは外観から雌雄の区別はできないと思い込んでいたので、その内容に首をひねりました。この内容を確認すべく、いろいろな本を調べてみましたが、出ている本がありません。雌雄の別についてふれていませんが、ヒナの写真を見ると、頭頂の赤い斑のつき方が明らかに違うのが分かり、書店でこのことについて述べている本を捜し、やっと見つけ納得しました。雄は、親と同様にくちばしのつけ根の額のところから後頭あたりまで赤く、雌は頭頂部分だけ赤いことが分かりました。

ここでまた疑問が生じました。キツキ類は、ヒナのうちから雌雄が分かるのかな?、その後、またいろいろな本を見ましたが、出ていません。どなたか、知っている方は、おたより下さい。お待ちしております。

白いカラス

平成10年9月3日の北海道新聞に、札幌市中央区の円山地区に真白いカラス(ハシブトガラス)が1羽現れ、

同地区に住む藤井京子さんが写したカラー写真とともにその記事が掲載されていました。

実は、私も初めての経験なのですが、この8月6日(金)に、中央区の円山の東側のすそを走る環状通に面した墓地で他の3羽の黒いカラスと一緒にいるのを観察しており、観察時期や場所からも同一個体ではないかと思いません。

墓地は、お盆に近いこともあり、墓に供物が置かれ、それをカラスがイタズラをしているところで、1羽の黒いカラスが幼鳥特有の濁った「ガー、ガー」という声を出していたことから、家族ではないかと思いました。この白いカラスの声は聞いていませんが、人に対する行動から幼鳥のようでした。観察したのは夕方5時半過ぎのため太陽は、全く当たらないせいか、一見した感じでは、灰色の強い乳白色の個体という感じでした。くちばしは黒く、目も黒かったのでアルビノではありませんでした。頭部の羽毛は新聞写真と同様に他の部位よりは濃い灰褐色に見えました。尾羽は全部白色でした。足は残念ながら確認していませんが、新聞では黒色となっています。

この時期にこの地域で見られたことから、冬には円山周辺をめぐらとする仲間と一緒に行動するのではないかと考えており、今後も観察できるのではと楽しみにしています。皆さんも、「なんだ、カラスか」と言わないで、白いカラスが混じっているのを期待して、真面目に観察してみたいかがでしょうか。

<白 澤>



チヨット変です。
鵜川が！

10. 8. 23

佐藤 幸典

今日の探鳥会、シギチは声も含めて5種でした。何が始まったのだらうと思われるぐらい、種類も数も少ないのです。このことはこの2、3年くらいの探鳥会の傾向で、1種が2回、2種が1回、ただし8種～10種のこともあったのですがやはり特別の時が印象に残るのはいなめません。

地元の人に事前に情報を聞いてもはかばかしくないので。私も9、15日に確認出来たのは4種、2種でした。

私の場合は探鳥会は久しぶりに鳥見人に会うのが目的だったりすることがありますが、結果的に今回はそのようでした。

昨年11月に「鵜川河口の環境を考える講演会」が鵜川の「四季の館」で開催されました。その資料を見ると昭和55年、61年、平成7年の鵜川河口の海岸線の後退で、干潟が著しく減少している様子がものすごいショックでした。

私は上流域の保水力の減少が影響していると、素人考えではありますが推察します。山を見ると緑には見えません。しかしササやぶでも遠目からは緑です。山に木が少ないのです。河川敷には公園や芝生を造成して、地域住民のレクリエーションのためとうたい文句は立派です。

本当の地域住民のためのことをもっと考えることを、地域住民が行政に訴えなければと、鳥を見ながら痛感します。

〒068-0834 岩見沢市駒園7丁目44-37

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、マガモ、カルガモ、メダイチドリ、アオアシシギ、ソリハシシギ、イソシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上22種

〔参加者〕松原寛直・敏子、岡 一穂、内田 孝、内川雄平、瀬戸麻美、山西、北山政人、鈴木繁夫・英子、芥川美津子、結城信重・倭文子、鷺田善幸、樋口孝城、蒲澤鉄太郎・則子、高栗 勇、渡辺、小堀煌治、板田孝弘、佐藤幸典、中正憲佑・弘子、羽田恭子、葉山、門村徳男、戸津高保・以知子、山田良造、佐藤正秀、荒木、大橋ミツエ、小山内恵子、佐藤ひろみ 以上35名

〔担当幹事〕中正憲佑、佐藤ひろみ

大雨のあとの鵜川探鳥会

10. 9. 6 富川 徹

植苗ウトナイ探鳥会に出て2回目という日さん(女性)に感想文をお願いしたのですが、私の頼み方が悪かったのか不幸にもお断りの手紙をいただきました。手紙には当会への丁寧なお礼と河口海岸で見たこともない鳥に巡り合えた喜び、そして野鳥だよりを読んで会員の熱意に大変驚かれたなどの感想が簡潔に書かれていました。それだけでも十分なのにと思ってしまうのですが、どうしても書けないということなので何とも残念であります。またどこかの探鳥会で日さんにお会いできることを確信します。

さて、8月末の台風4号の大雨から鵜川河口の周辺は河川増水による大きな影響(被害?)を受けているという情報がマスコミ等から聞こえていました。担当幹事として多少なりにも心配してしまいましたが、野鳥観察においてはそれらがかえって好条件となり思いがけない珍鳥に出会えるチャンスにと期待することになりました。探鳥のスタート時にはパラパラと雨もありましたが、河川右岸に出たころには日も差し歩くほどに汗ばむもありました。はじめのうち辺りは増水の影響はほとんど受けられない平常であるかのように伺わせましたが、歩きはじめると氾濫の形跡が一目瞭然という箇所も所々に見受けられ、さっそくめったにない現場をカメラに収めたりもしました。そのひとつに、河口右岸の生活排水路出口が増水等により埋まってしまった(ふさがった)ことがあげられ、あらためて自然の驚異を感じさせられました。それが近年はいつもアプローチができない海岸線までの足運びを可能にさせるという幸いに導き、ほぼあきらめかけていたシギチを間近な距離で観察できる結果につながりました。鳥はコチドリ2羽、メダイチドリ7羽、イソシギ5羽、キアシシギ1羽、トウネン8羽を確認し、現状を考えますと十数年前の探鳥会とまでには到底およびませんがまずまず満足のいく結果であったといえます。

最近、ようやく鵜川に地元の人を中心とする自然の会が結成され、行政や関係各所を交えて鵜川河口等の重要性を再認識すると同時に、自然保護に向けての検討の動きが見られています。当会では昭和46年から鵜川で探鳥会を行って来ており、これからの活動維持上において、またシギチの鵜川の再現を目指すためにもできることの協力を行えたらと思います。

〔記録された鳥〕ウミウ、アオサギ、トビ、コガモ、カルガモ、コチドリ、メダイチドリ、イソシギ、キアシシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモ

メ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、センダイムシクイ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上24種
〔参加者〕逸見とも子、村上トヨ、安河内佳乃、沢部勝、小堀煌治、山田良造、小松典子、富川 徹、坂口秀子、永島良郎・トキ江 以上11名
〔担当幹事〕富川 徹、永島良郎

宮島沼探鳥会に参加して

10.10.11 安東 聡子

10月11日、野外に出るには絶好のいい天気でした。友人の運転する車に乗って宮島沼に到着したのが30分前。すでにいかにもという恰好をした人々が大勢双眼鏡を手に鳥を見ているところでした。それまでは初めての探鳥会への参加であったため多少なりとも緊張していましたが、刺激を受けて俄然やる気が出て来ました。

そうして迎えた探鳥会、何よりもまず1万7千羽も(ノ)いるというマガンの群れに圧倒されました。ピーク時には3万羽以上もいたというから驚きです。それに混じってアオサギと真っ白なダイサギが…。早速「ほら、プロミナにダイサギが入っているから見てごらん。」と声を掛けて下さった方がいて、ダイサギ(一緒にアオサギも)を真近に堪能することが出来ました。本当に皆様、気さくに話し掛けて下さり感激でした。他にもカイツブリやヒシクイなどを教わって、マガンとヒシクイの区別に夢中になっていたところに、誰かが何とオジロワシが6羽のトビに追われているのを発見。ノオジロワシは何回もトビに体当たりを食らいながら懸命に逃げていました。縄張り意識から来る行動だったのでしょうか。印象的な出来事でした。

それからまた鳥を見たり、回って来た写真を見て鳥の名前を当てたり、色々なことをしゃべったりしている内にあっという間に終了の時間になってしまいました。“野鳥チェックリスト”が配られ鳥合わせです。結局確認された種は、スズメ、カラスも入れて36種。その内自分の目で見る事が出来たのは(ほとんど見せてもらったのですが)12種でした。初心者だし、まあこんなものかなといったところです。

とにかく久々にすごく楽しい時を過ごすことが出来て大満足でした。始める時におっしゃっていた「探鳥はストレス解消」という言葉に納得した一日となりました。
〒001-0013 札幌市北区北13条西4丁目

エルムハイデンス907

〔記録された鳥〕カイツブリ、ダイサギ、アオサギ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、チュウビ、ハヤブサ、コハクチョウ、シジュウカラガン、ヒシクイ、マガン、カリガ

ネ、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、ムナグロ、ツルシギ、アオアシシギ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、オオハシシギ 以上37種

〔参加者〕和久雅夫、佐藤ひろみ、松井 洋・照子、関根昭吉、西根紀子、広川淳子、松原寛直・敏子、高栗勇、中島宏章、新城 久、田辺 至、永島良郎・トキ江、蒲澤鉄太郎・則子、鈴木繁雄・英子、尾田和雄、香川稔、成澤里美、中正憲信・弘子、高橋三千夫、高橋淳子、佐藤 勇、樋口孝城、佐藤幸典、北山政人、秋田和子、木村敏明、加藤花子、南 英雄、吉田慶子、山田良造、戸津高保・以知子、富川 徹、
安東聡子ほか北大生6名以上 合計47名
〔担当幹事〕富川 徹、山田良造

オオハシシギの追加について

宮島沼探鳥会において、オオハシシギとみられる鳥が3羽観察されたが、鳥合わせの時点においては確定には至らなかった。しかしながら、その後に引き続いての検討の結果、以下の理由からオオハシシギに間違いのないという結論に達したので、リストに追加された。なお、検討に加わったのは5名の会員で、いずれも1～2週間前に札幌大橋下流排泥池にてオオハシシギを間近に観察したメンバーである。

1. 同時に観察されたツルシギ、アオアシシギよりも少し小型であること。
2. 嘴はまっすぐで、根元から先端までの太さがほとんど変わらないこと。
3. 頭部の長さに比べた嘴の長さが、ツルシギのそれよりも明らかに長いこと。
4. ツルシギに比べて、明らかに足が短いこと。
5. 上尾筒から背にかけて、V字形の白が明瞭であること。
6. 翼下面が白いこと。

遠距離での観察のため、足の色、眉班などは不明であったが、上記の特徴は、オオハシシギと断定するのに十分であろうと結論された。



【藤の沢】平成11年1月17日(日)

雪と寒さに覆われた真冬です。年間を通して最も種類の少ない時期であるとともに、夏のように気楽に一寸鳥を見に行くという機会も少なくなりがちです。

この日は南区藤野の住宅地の外

れに、地元の小鳥の村の村長さんとして長きに亘り野鳥の観察や保護活動を通して愛鳥教育に力を尽くされた小沢広記さんが遺れた白鳥園（観察小屋）に集まり、暖かい室内からバードテーブルに集まる野鳥を身近に観察します。

合間を見計らって愛鳥教育モデル校として数々の表彰に輝き、野鳥の保護、自然観察を教育の基幹に熱心な活動を続ける藤の沢小学校を訪れ、長年受け継がれて来ている子どもたちの野鳥の観察記録や保護の実践活動の記録、展示資料などを見せて戴きます。

子どもたちが自然とのかかわりあいから学び培われた情操教育の素晴らしい成果にも触れて見たいと思います。

鳥を愛する人たちの集まりですから、どなたでも気軽な気持ちでの参加を歓迎します。

集合＝午前10時 白鳥園（南区藤野693-1）

交通＝定鉄バス（定山溪線）藤野3条2丁目下車
藤野スキー場方向へ徒歩約20分

参加費＝500円（予定）

【野幌森林公園】平成11年2月7日（日）

雪に埋もれ寒さととともに最も餌採りの難しい季節です。自然の中で生き残るため酷しい試練に耐え、逞しく活動する姿には感動さえ覚えます。

この森に1年中いるカラ類アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、冬鳥としてやって来るツグミ、アトリ、マヒワ、イスカなどの他、ヒヨドリ、ウソ、キクイタダキなどもこの時期良く出会う鳥たちです。

雪に覆われた野幌森林公園を歩いて、鳥たちの生活ぶりを覗いて見ては如何でしょう。

歩くスキーのコースを歩きますので普通の長靴、防寒靴でも結構、歩くスキーで参加される方もおられます。

集合＝午前9時 大沢口駐車場入口

【円山公園】平成11年3月7日（日）

冬も峠を越え日中の陽差しにも春が感じられる季節を迎えています。春を待ちこがれる鳥たちの中には早くも囀りを始めるもの、巣穴を探し始めるものもあります。

季節的にはカラ類ヒヨドリ、アカゲラ、コゲラなどの留鳥を中心に冬鳥のツグミ、アトリ、マヒワなどの他、ウソ、日本で最も小さい野鳥キクイタダキとの出会いも多い季節です。

地下鉄円山公園駅から徒歩3～4分という参加し易い場所でもありますのでお気軽に参加してみませんか。

集合＝午前9時 円山公園入口付近

地下鉄東西線円山公園下車、駅から徒歩約3分
午前中解散予定

【ウトナイ湖】平成11年3月28日（日）

湖面の氷も解け北の繁殖地へ向かうガン・カモ類の水鳥たちで賑わいます。湖の奥の方にはマガンやカモ類の大群が集まり、時折なにごとに驚き一斉に飛び立つ光景は見事なもの、ハクチョウも5羽～10数羽のグループで羽ばたき飛翔着水を繰り返す姿も実に奇麗なものです。残氷の上にはオオワシ、オジロワシの雄々しい姿、そして勇壮な飛翔・帆翔は圧巻です。

好天の日でも湖面を吹き渡る風は寒く、真冬並みの身支度が無難です。

集合＝午前9時40分 ウトナイ湖畔駐車場湖畔側

交通＝新千歳空港発道南バス（苫小牧行き）

ウトナイレイクランド前下車

☆交通機関を利用の方は、各自でお確かめ下さい。

☆昼食、雨具、図鑑、観察用具、筆記具などをお持ち下さい。

☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせは

011-251-5465 自然保護協会事務所まで

（月～金曜日 10:00～16:00）時間厳守のこと。



◆新年講演会のご案内

愛護会新年講演会を下記の要項で開催いたします。

日時：平成11年1月23日（土）

午後1時30分～

場所：札幌市女性センター

（札幌市中央区大通西19丁目）

講演：「鳥の鳥たち」マーク・ブラジル

マーク・ブラジル（Mark A. Brazil）氏は、今春、酪農学園大学環境システム学部地域環境科に教授として赴任され、来年から環境生態学を講ずることになっています。野幌森林公園の愛護会探鳥会にも何度か参加されています。The Birds of Japanの著者として有名ですが、クジラウォッチングなどエコツーリズムの問題にも関心を寄せています。今回の講演では、「鳥の鳥たち」と題し、ガラパゴス、フォークランドなど世界や日本の主要な鳥の鳥たちをスライドを使って紹介していただきます。

スライド映写

みなさんの持ち寄ったスライドを映写します。たくさんの方の作品の参加をお待ちしています。

会費：500円の予定です。

◆写真展の作品を募集します。

平成11年度も野鳥写真展の開催を予定しています。

場所は光映堂フォトギャラリー（札幌市中央区大通西3丁目）の予定です。日時については、次号の「野鳥便り」でお知らせします。

これから撮影という方もまだ間に合いますので、奮ってご参加ください。

◆新会員のご紹介（敬称略）

秋田和子 札幌市豊平区西岡5条11丁目18-23

◆会員住所変更のお知らせ（敬称略）

渡邊智子 札幌市西区宮の沢3条4丁目11-5

◆名前、住所変更の時はお届けをお願いします。

結婚、転居などで名前、住所等に変更があったときは、届け出てください。「野鳥便り」等が届かない場合がありますのでよろしくをお願いします。

野鳥の情報を求めています

さっぽろ自然調査館

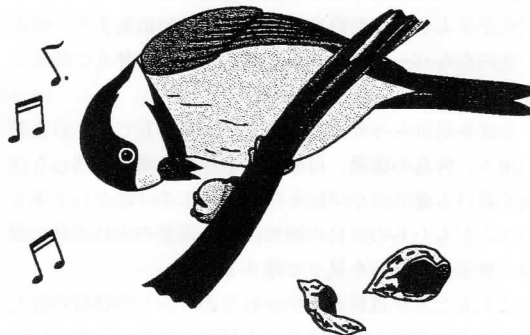
今札幌の緑地が動物たちに果たす役割を調べています（今年は樹木・草花・ノネズミを調査）。その一環として「札幌の公園・緑地の野鳥」「野鳥の食べている果実」の2つの観察情報を募集しています。以下の項目について（過去の記録などで情報が不完全であっても構いません）、記録を送って下さい。お送りいただいた方には、集計結果などを順次お知らせするほか、オリジナルの野鳥折り紙とシールを差し上げます（連絡先をお願いします）。また、今後身近な緑地を継続して調べてみようという方・私たちの調査に参加して見たいという方を募集しています。ご連絡下さい。

連絡先・さっぽろ自然調査館

〒001-0020 札幌市北区北20条西2丁目
野菊荘3
電話&FAX：011-(707)-7721
電子メール：DZX04703@niftyserve.or.jp

1. 札幌市内の公園・緑地で見られる野鳥

●どんな情報？ 身近な緑地や公園（特に厚別区・清田区）で観察した野鳥や小動物（リス・ザリガニなど）の種類を記録して下さい。もし分かれば個体数・営巣数・よく見かけるかどうか、などの情報も書いて下さい。



●何のため？ 「どこに何がいるか」というのは自然の保護や教育利用のための基本的な情報です。しかし、小さな緑地や公園ごとに調べたものはないので身近に観察している人の情報を集積したいのです。

●項目 ①緑地名 ②観察年月日 ③観察時刻 ④観察者名 ⑤野鳥名・確認方法（声・姿）・羽数・行動・営巣の有無など

例) ①青葉中央公園 ②1998/05/06 ③11時位

野鳥名	確認	羽数	多い	営巣	行動
ゴジュウカラ	声	(○)	(?)	さえずり	
アカゲラ	声・姿	1羽	(?)	(?)	採餌・飛翔

2. 野鳥が食べているものの種類（特に果実類）

●どんな情報？ 何かを食べている野鳥を見かけたら、野鳥の種類と食べ物の種類を記録して下さい。野鳥によってはすぐに食べずに隠すものもいるので（貯食）それも分かれば記録して下さい。場所は緑地に限らず自宅の庭や街路樹でも構いません。好みの順序なども分かれば教えて下さい。

●何のため？ 植物の分布と動物との関係を調べる基本情報とします。意外な組み合わせがあるかもしれません。

●項目 ①観察年月日 ②場所 ③観察者名 ④野鳥名・植物名・採餌部位〔果肉・種・花・芽・虫〕・野鳥の数・貯食？

野鳥名	植物名	部位	野鳥の数	貯食？
アトリ	ナナカマド	種？	群れ	(×)
ヤマガラ	ハクウンボク	種	2羽	(○)

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）

郵便振替 02710-5-18287

☎060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465